



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パレートの『社会主義体系』序論とエリート論
Author(s)	佐藤, 茂行
Citation	経済學研究, 38(4), 74-83
Issue Date	1989-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31812
Type	departmental bulletin paper
File Information	38(4)_P74-83.pdf



<研究ノート>

パレートの『社会主義体系』序論とエリート論

佐藤 茂 行

パレートの『社会主義体系』イタリア語版に付されたジョヴァンニ・ブズィーノの序論は、それ自体、パレートの社会主義論にかんする一つの優れた論考でもあるが、そのなかでかれは、『社会主義体系』（以下、『体系』と略称）の長い序論は、この著作全体を見事に要約したものだとして述べている¹⁾。しかし、この、確かに長大な序論を読むと、その論議の大部分が、いわゆるエリートの交代をめぐる問題に費やされていることがわかる。ところが、これに対して、本論の方は、この著作のタイトルが示すように、社会主義のさまざまな思想体系を扱っており、その内容の大部分は、かならずしもエリート論に要約されるようには見受けられない。そうだとしたら、『体系』序論のエリート論は、いったい何を意味しているのか。

この疑問を解く鍵は、『体系』の執筆中に発表された論文「社会学的理論の一つの応用」²⁾（以下、「応用」と略称）のなかにある。この論文は標題に示されているとおり、いくつかの社

会学的法則を明らかにしたうえで、それらを現実の問題の分析に応用して見せたものである。その現実の問題とは何か。それは当時、澎湃として高まりつつあった社会主義運動の意義であった。したがって、この論文は、エリート論というより、むしろ同時代の社会主義運動の歴史的意義を論じた一つ社会主義論なのである。

その内容を概観してみよう。まず、ここでの社会学的法則というのは、1) 人間の行為の大部分は、論理的推論ではなく、感情にもとづくこと³⁾。2) 社会学的現象は、実在する事物の関係を形づくる客観的形態と、人間の心理状態の関係を形づくる主観的形態の二つにはっきりと分かれること⁴⁾。3) 主観的形態は客観的現象を反映すること（したがって、その反映が正しいかどうか確かめる必要があること）。4) 実在的現象〔つまり客観的現象〕は、主観的現象を修正する働きをすること（なお、その逆もあること⁵⁾。5) 道徳や宗教、政治には（人間

3) [5] pp. 179 : [11] pp. 8.

4) [5] p. 180 : [11] p. 9.

5) [5] pp. 180-181 : [11] p. 11 「実在的現象が主観的現象を修正する働きをする」ということは、客観的現象の影響を受けて主観的現象が変化するということである。ここでパレートは2)で問題とされた主観の歪みについてではなく、その歪みが客観的現象によってもたらされるということを説いているのである。この逆は主観的現象が客観的現象に影響を与えることである。このことを、パレートは一応ここで指摘しているが、その可能性については否定的である。それは、理論が運動を生み出しているかのように考えて「マルクスの理論と闘うことで、社会主義と有効に闘うこと

1) [3] p. 25 なお、この序文は、後に論文の体裁を整えて[4]に収録されている。

2) [5] この論文には翻訳[11]がある。これは、明記されていないが、英訳からの重訳と思われる。この訳者は「本論文自体厳密な概念の構成を主眼にしているものでないことから意識をしても許されるのではないかと述べている。しかし、この翻訳には意識と言えども「許され」ない、パレートの基本的な「概念の構成」に誤解を与えるような不正確さがある（注5）と7）を参照）。本稿では、この訳文の採用は見合わせる。ただし、参考のために関連ページだけは指示してある。

の心理的リズムの表れでもある) 経済変動と非常によく似た変動がみられること⁶⁾。6) 人間の歴史は貴族の人間の交代の歴史であること⁷⁾。

以上の社会学的法則の観点からパレートは、当時の社会主義運動の客観的意義を解明する。まず、この社会主義運動が、一種の宗教運動であり、それは、宗教的感情の昂揚によってもたらされた行動の一形態であることを指摘する。そして同時に、この運動が人間の宗教的感情のリズムと結びついた、貴族階級の交代運動の一局面を表していることを示す。具体的に言うと、この社会主義運動は、ブルジョワジーからなる衰退過程にある貴族階級と、社会主義の指導者からなる新しい貴族階級との交代局面を示しているというのである⁸⁾。他方、以上の客観

的現象は、実際には、主観的現象としてつぎのように反映される。たとえば、宗教的感情にもとづく社会主義運動は、宗教的感情ではなく科学的推論にもとづくと考えられたり、同じく、貴族階級の交代運動の一局面(ドレフュス事件もその一つの表れである)は社会正義のための運動であると考えられたりする。また同様に、客観的現象としては、社会主義運動が理論を生み出しているのであるが、主観的現象では、逆に、理論が運動を生み出しているかのように考えられたりする⁹⁾。パレートは以上のような議論を、さまざまな歴史的事例を随所に引用しながら展開しているのである。

さて、それでは、以上の議論は『体系』序論とどうかかわっているのか。そこで、まず、『体系』序論と、この論文の内容を比較してみる。その結果、序論が上記の社会学的法則の説明部分に対応したものであり、その説明を一層くわしく展開したものであることがわかる。ただし、そこには、つぎのような注目すべき相違がある。それは、序論では、「応用」にみられる同時代の社会主義運動にかんする議論が結論部分で展開されるに止まる一方、「応用」での貴族階級の交代運動が、エリートの周流と名づけられて、その事実が歴史的にくわしく説明されているということである。ここから、つぎのことが判明する。社会学的法則のうち、エリートの交代運動の法則にかんして、『体系』序論ではその歴史的事実が示され、「応用」ではその現代的形態、つまりブルジョワジーの旧エリートと社会主義者の新エリートとの交代の事実が主として扱われているということである。

ところで、こうした歴史的事実と同時代の事実とは、実は一つの方法論によって、はっきりと結びつけられているのである。このことを裏付ける記述が「応用」の序説的部分に見られる。そこにはこう書かれている。「ここで本題にすることにするが、そこで、いくつかの社会学的

ができると思う」主観的現象を、一つの幻想と見るパレートの評価 ([5] p. 237) から明らかである。このパレートの立場は、後年はっきりと理論化される。たとえば [9] §162を参照。しかし、[11] p. 11 では、この部分は「真実の現象がどのようにして主観的現象に作用し、修正されるのか、またその逆のばあいにはどのようにか」となっている。これだと、「真実の現象」の方が主観的現象によって修正されることになり、パレートの基本的考えと反対になる。原文を示しておこう。
... come il fenomeno reale operi per modificare il fenomeno soggettivo e viceversa.

6) [5] p. 182: [11] p. 13.

7) [5] p. 186: [11] p. 19 パレートは、ここで、貴族階級の交代の法則が「生理学的法則」(una legge fisiologica) にしたがっていると見ている ([5] p. 186)。この生理学的法則というのは、かれの『経済学講義』で用いられている「社会生理学」([6] pp. 347 sq.) の法則のことであろう。それは内容的にみて、社会学的法則の一種と考えて差し支えない。そして、パレートは、実はこの『経済学講義』の「社会生理学」の中で、エリート論の基礎となる、いくつかの社会学的事実の分析を行っていたのである。なお [11] p. 20 では、これが「心理学的法則」となっているが、これだと意味がまったく異なったものになってしまう。パレートは心理学のレヴェルにまで立ち入った考察を行ってはいないし、その後もこれに類する試みは避けている。[9] § 161 を参照。

8) [5] pp. 182, 190, 206, 218-220: [11] pp. 13, 28, 50, 67-70. なお、「応用」に2ヶ月ほど先立つ1900年5月に発表された [7] p. 322を見ても、パレートが、当時の「さまざまな徴候から推して」社会主義者の権力獲得による「社会経済革命が避

けられないと信じている」ことは明らかであった。

9) [5] pp. 234-235, 237: [11] pp. 98-99, 103.

法則を思い起こすことから始めよう。これらの法則は、事実から帰納されたものであるが、それを今、あらためて演繹を通じ、事実によって試してみる必要がある。このようにして、事実から構想、そして、さらに構想から事実へ戻るといふ、クロード・ベルナルが推奨した方法に従うことにする。今ここで発表する断片には、この後半部分だけしか見当たらないであろう。もっと十分に長い前半部分は、わたしが専念している社会学の大論文が完成し、出版されることにでもなれば、そのなかに入れられるであろう¹⁰⁾。

文中にある「社会学の大論文」というのは『社会主義体系』を指すことは明らかである¹¹⁾。また、ここでの社会学的法則は、エリートの交代法則だけではない。しかし、『体系』と「応用」を突き合わせると、ベルナルの方法が用いられているのは、実質的にはエリートの交代法則だけである。他の法則の扱いは、『体系』序論と「応用」とでは基本的に変わりはないからである。

以上から、エリートの周流法則にかなする『体系』序説と「応用」は、つぎのような関係にあると言える。すなわち、それは『体系』序論の中の歴史的事実の帰納分析によって得られたエリートの周流法則¹²⁾が、「応用」の中の現実的事実によって検証されているということである。なお、ここで留意すべき点を補足しておく。

10) [5] pp. 179 : [11] p. 7 ここでいう構想 (idea) が、パレートにあっては、社会学的法則、そして結果的には、仮説としての「エリートの周流」法則 (構想) ということになる。

11) 「応用」は1900年7月の「イタリア社会学雑誌」[10] に発表されている。当時、パレートが専心していた大著は『社会主義体系』を描いてない。「気が狂ったように」打ち込んでいたこの著作が完成したのは1901年10月であった ([3] p. 25)。

12) 序論の説明では、まず一般法則が明らかにされ、つぎに、その具体例を示すかたちで歴史的事実が示されている。このように、説明は、一般から事実へという順序になっているが、探求としては、事実から一般へという順序で行われたものと思われる。

1) 法則の検証ということは、現実的事実の側から見ると、この事実が法則の応用として説明されることでもある。つまり、現実的事実が法則によって説明されるということである。

「応用」のタイトルは、まさにこの側面を表現したものであろう¹³⁾。2) 帰納の対象となる事実と、法則を検証する事実とは、事実という点では同じであるが、内容は異なる。前者が歴史的事実であるのに対し後者は現実的事実だからである¹⁴⁾。

ところで、両者の関係に示されている方法とのかかわりで問題となるのは、パレートが、いったい何のために歴史的事実の分析を行っているのかということである。そのもっとも自然な答えは、現実的事実を説明するため、というものであろう。そうだとしたら、ここから、つぎのようなパレートの思考の構図が浮かび上がってくる。すなわち、まず、社会主義運動の現実を見て、その事実の意味を歴史的事実のなかに求める。そして、この過程でエリートの周流と社会主義運動との関連を見出す。そこで、あらためて現実の社会主義運動の事実に戻って、今度はこれを、そのエリートの周流法則によって説明する、というのがそれである。

以上から、パレートのエリートの周流理論が、当時の社会主義運動に触発され、この運動の意味を解く試みの中で形成されたことが推測される¹⁵⁾。そして同時に、『体系』序論のエリート論の意義もここから明らかになる。それは「応用」

13) タイトルでは「法則」ではなく、「社会学的理論」の応用となっているが、理論を法則の説明体系と解すれば、この点は納得がいくであろう。

14) パレートは、この引用文では、これらの事実を区別していない。しかし方法的にこれらの事実が同一である必要のないことは明らかである。ちなみに、ベルナルの一文を紹介しておく。「実験家は推理し、獲得した事実の上に立って他の事実を想定し、合理的にこれを喚起しようとする。」[12] p. 49.

15) この理論の「心理的形成」を扱った文献[1]もあるが、この種の試みが、精神分析的手法を用いたボルケナウのパレート論[2]と同様、どれだけ意義があるのか疑問に思われる。

との関係分析から推して、こう結論できる。『体系』序論でエリートの交代に多くのページが割かれているのは、本論でのさまざまな社会主義体系の分析が、最終的には当時の社会主義運動の意味を明らかにすることを目指していたからである、と。このように考えると、『体系』の序論が、本論のそうした目的にとって欠かせない重要な前提、すなわちエリート論を主として扱っていることが少しも不思議でなくなる。

以上、疑問が解消されたところで、ちなみに、『体系』序論の、エリートの周流の論拠として、どのような歴史的「事実」が取り上げられているかを紹介しておこう。以下、関連する部分の本文を全文抜粋して示す。

《ローマの歴史は、つぎつぎと権力を得るに至った数多くのエリートを、われわれに示している。

これらエリートは、まず、ローマとラティウムの農村階級から、ついで、これらの階級が消滅すると、さらにイタリア、ゴール、スペインの農村階級から輩出し、ついには、蛮族すら、この輩出に寄与することになる。

すでに、ずっと昔、上位氏族 (*maiores gentes*) と、新しいエリート、すなわち下位氏族 (*minores gentes*) との間の闘いがうかがわれる。そして先代のタルクイヌスは前者と並んで後者を元老院へ参加させるよう訴えたらしい。レクリヴァンはこう述べている。「貴族の一門は、とりわけ多産であったとは思われない。子供の標準数が5人と主張されてきたのは誤りである。貴族の一門の歴史をみても同じ結論に達する。王政の貴族も共和制の貴族も絶え間ない消滅の道を歩んでいる。だから、タルクイヌスが下位氏族を貴族に引き上げて、元老院の空席を埋めたことは容認できる。」結局、ここでは一つの浸透が問題となったようである。そして、この浸透が、他方で、パラチヌス丘とクイリスの自治体の合併の起源となったように思われる。それにしても、上位氏族と下位氏族の間の

抗争を示す証拠には、こと欠かない。当然のことだが、下位氏族が上位氏族と権力を分かち合ったとき、前者は、後者と同じく、残りの民衆にたいして強硬な態度をとるようになった。

実際には、古い貴族階級と、下層階級から出現した新しい貴族階級との間の闘いなのであるが、俗説によると、共和制が確立されるや否や、「貴族階級」と「民衆」との闘いが始まったという。「抗争は市民間の内部に集中している。さらに、これと平行して、もう一つの運動、都市に憧れる非市民のそれが感じられる。平民、ラティウム人、イタリア人、解放奴隷の不穏な動きが、その結果である。かれらは、平民や解放奴隷のように、すでに市民という名称をもっていたり、ラティウム人やイタリア人のように、まだその名称を受け取っていなかったりしているが、これらのいずれもが、政治的平等の必要を深く感じて、これを要求しているのである」。これは一面の真理でしかない。新しいエリートが、かれらの手勢に「都市を」攻略するよう、けしかけたのであり、またこの手勢に政治的平等と、それ以上に、敵方の財産を与えることを約束したのである。「かれらの貧民の悲嘆が、かれら指導者たちの最強の武器なのである。仮に、法律によって貧民が唯一の同業者団体に結集することがなかったとしたら、指導者たちの不満が貧民への関心に結びつくことはなかったであろう」。ローマにあって、貧民は、かれらの指導者に追従した。なぜなら、貧民は「負債と、いくつかの所有地からの解放」を望んだからである。周知のとおり、裕福な平民貴族も同じく存在していた。そして、かれらは古い貴族と同じような強い力を持ちたいと願っていた。「国民の権力は平民階級、あるいは多数者へと移行していた。そしてその多数者のなかには、すでに順位が見られ、多数の有力者や金持ちが見られた」。かれらこそ権力の獲得へと向かう新しいエリートなのである。これらエリートは多数者の利益に沿った要求のヴェールの奥に、かれらの野望を押し隠しており、そうした要求は一

つの手段であって、目的ではない。多数者に対して、その指導者は農地法や負債の解消を約束する。それは、ちょうど、後に、帝位の候補者が軍団に贈与金 (*donativum*) を約束するのとまったく同じことである。

平民のエリートは元老院に入り込んだ。もし、それまでの在り方どおりだとしたら、かれらは、そこで、ほぼ半数の席を占めているだろう。その際「当然考えられることだが、富裕階級は、物質的利益に大いに与かったということである。それは貴族が政治的秩序のなかでの特権の濫用から引き出した利益を上回っていた。そして、もっとも抜け目のない、また抵抗を指導することにもっとも長けた人間が元老院に入り込むことにより、非抑圧者の身分が抑圧者の身分へと移動し、それが進むにつれて、大衆は苦痛を強く感じるようになる」。だが古い貴族階級は依然としていくつかの権利を保持し、それらを排他的に享受しようとしていた。そこで、争いは高位高官職の配分をめぐる再開された。この争いは長期にわたった。「なぜなら、そこでは、もはや一般的利益を満たすことではなく、幾人かの民衆の指導者の野心だけが問題であったからである。だから攻撃は止まなかったが、支援は十分でなかったし、また称号だけで満足した平民は長い間、ことを放置した。われわれは、平民が土壇場で、数アルパンの土地のためにリキウス・ストロと執政官の職をまさに見捨てようとするのを見るであろう」。平民たちは、多分、間違っていない。とにかく数アルパンの土地は、非常に身近な問題であったからである。今日のフランスにおける多くの社会主義者なども、かれらの指導者の一人がワルデック・ルソー内閣の閣僚に迎えられたことによって与えられた名誉が、ブルジョワの財産にたいするかれらの分け前の代わりになりうるとは思っていない。

ローマでは「平民貴族が護民官の職を奪い取ることによって、それをかれらの目的に転化させるようになって以来、農地法や貸付法は、あ

る意味で、蔑ろにされていた。しかし、それでも新たな征服地が無かったわけでもないし、貧しい市民がいなかったわけでも、地方での貧困化がすすんでいなかったわけでもない」。だが、ある時期、すべての帝位候補者が兵士たちに金を与えること以外何もすることがないと思ひ込みに至ると、ちょうど同じように、「大衆の無関心に助けられていた貴族が抵抗して、政治的平等の利益が得られなくなったとき、平民貴族は、貴族階級の前で孤立し無力となっていた不幸な群衆と、同盟協約の確認を行ったのである」。

新しい貴族階級が勝利を収める。リキニウス・セクスティウス (*Liciniae sextiae*) 法は、一見、市民の間の平等を確立しているように見えるが、実際上は「その後も以前と同様、貴族的政治体制が続いた」のである。往々にして、ある抽象的な関係が、偶然によって具体的形態をとることがある。新しい法律の創始者であるガイウス・リキニウス・ストロは、その法律にもとづいて有罪判決を受けた最初の人間となったのだが、かれは自分の階級に軍隊を獲得するためにのみ作られていた筈の法律が、自分に適用されたことに愕然としなければならなかったのである。

エリートの周流運動が再開される。「新しい貴族的政治体制が成立したところで、同時に、この体制に立ち向かう反対の党派が現れた。……かれら (新しい対抗者たち) は、下層の人間、とりわけ小耕作者の味方となる」。言い換えれば、新しいエリートは、これらの人間のなかに加入者を求める。かれらが、そうした加入者を発見できるのは、これらの人間たちのなかなのである。いずれにせよ、権力の座につくに至った者は、これらの人間のなかに加入者を求めたのである。

もう一つ別のエリートが登場する。ローマの本来の農村階級は衰弱し、消滅しつつあった。「市民となった平民の下に、百人組や諸族のほか、すでに急速に増大していた解放民や職人、

商人、ローマに居を定めていた投票権をもたない (*sine suffragio*) 都市住民、最後に、最下層市民 (*aerarii*) が生活していた。これらのなかには裕福な、活動的で知的な人間たちが含まれていた」。ニーブールは、つぎのように強調している。「自治都市は新しい同族を送り出すことによって、国を若返らせたのである」と。このことは、それ以後のローマ史に決定的影響を及ぼす重大な事実である。ローマは徐々に近隣の国民のあらゆるエリートを取り込んで行く。これらのエリートの総てを貪りつくしたとき、ローマは没落する。

元老院の議員たち (*patres*) は、これらの新しい階級のエリートに依拠しようと試みる。この現象は頻繁にみられ、古い貴族階級の生き残りは、同じような手口を使って味方の確保に努める。

監察官であったアッピウスは、部族のなかに新しい階級の人間たちを登録し、そのことで平民貴族の忿懣を買ったが、その平民貴族は、権力の座について以後、凡庸にも「下層の人間や貧民」を気にしていたのである。書記のグナエウス・フラヴィウスは、新しいエリートに属していたが、かれは「確かに、当代の非常に傑出した人物の一人であった」。

アッピウスの改革は時期尚早の面をもっていた。新しい市民の登録の仕方における一つの変化、これら市民の意志表示の重みを低下させる変化は、その少し後で生じたのであった。運動が再開されるや、それはもはや止どまるところを知らなかった。

それにしても、これらの詳細については、興味深いのだが、やはり短縮し、割愛しなければならぬまい。というのは、そうしないと、この事例の説明の展開が本書の残りのそれと均整を欠くことになるからである。

エリートは、その経済的、社会的生活条件に従って、多くの仕方で現れる。商業的、工業的国民にあっては富の獲得、好戦的国民にあっては軍事的成功、専制政治の国民にあっては政治

的手腕とか、しばしば策謀心や品性の下劣さ、中国の国民にあっては民主主義と民衆の扇動、文学上の成功、中世では教会の榮譽の獲得、以上のことがらは、人間の淘汰がなされる同じ手段なのである。

グラックス兄弟の護民官の時期以降、共和制の終末までの間、ローマでは、自前の馬による (*equo privato*) 騎士団員の大部分は、田舎の氏族の出であり金権政治的な淘汰の産物なのである。また富裕な収税吏の数も増大するようになっていた。

だが、こうしたエリートとならんで、民兵出身の、もう一つのエリートが形成されていた。投票権のない (*sine suffragio*) 市民とか同盟者のイタリア人たち (*socii*) はすべて兵役に服することになっていた。こうして、淘汰は、やがて、すべてのイタリア人にまで及び、その指導者たち (*praefecti sociorum*) はローマ市民の権利をもつようになっていた。軍旗の下での兵役が、市民の一時的な義務の仕事から、一つの職業となったとき、淘汰はさらに強まった。それはマリウスとともに始まる。かれは、「もはや、それまで必須とされていた財産の条件を気にかけなかった最初の人間であった。かれは、立派な兵士であることが証明される限り、市民の間のもっとも貧しい志願兵にたいしても軍団の階級を昇進できる道を開いたのである」。マリウス、スラ、シーザ、オクタヴィアヌスは、異なった政治原則を代表している。しかし、かれらは、基本的には、いずれも等しく新しいエリートの指導者なのである。かれらは軍事的淘汰によって生み出されたエリートであり、このエリートは騎士団のエリートと同盟することによって帝国を打ち立て、これを数世紀にわたって保持するようになる。

貴族的統治の復古者であるスラの勝利は新しい人間のおかげである。アジアでの戦役のために、二人の護民官が、スラから、かれの軍団を取り上げて、マリウスに与えるためにノラにやってきたとき、一人の審問官を除き、士官たち

はスラを見捨てた。しかし兵士たちはスラに忠実であり続けた。そしてスラがローマ入りし、かれの意志を強制するのは、兵士たちの指導者としてなのである。長い間、軍隊は一つのエリートを表した。そしてそのエリートは、あらゆるエリートと同様、下層階級から浮上してきたのであった。デュリュイは、ローマ帝国を語るなかで、こう言っている。「アウグストゥスの他の制度が消滅したなかであって、ただ一つ生き残った軍事的力が、すべてを支配した。同時代の人間は、そのことに驚きはしなかった。数世紀の間、軍隊は武装したローマ国民であった。この遠い記憶は絶対に消え去りはしなかった。そして帝国を防衛していた軍隊は、ローマ国民の構成にもかかわらず、帝国を代表するに値すると見られていた唯一の集団なのであった。聖ヒエロニムスは同じようなことを考えていた。というのは、かれは司祭による司教の選挙を、兵士による皇帝の選挙になぞらえているからである」。

「王政が絶えたあと、ギリシャの最初のいくつかの共和国は、戦士たちによって組織されていた」。中世ヨーロッパでは、ふたたび、封建貴族が戦士たちのエリートのなかで権力を集約しているのである。

クラウディウスはクリアを充実するためにエリートの選抜をゴールにまで拡大し、ヴェスパシアヌスは、それを他の地域に拡大した。トラヤヌスとともにスペインから皇帝がローマに送り出された。ついで、蛮族自身も帝位についた。

帝国末期のほとんど全期を通じて、エリートの周流は止んだ。各人をその職業に縛りつける措置がとられたからである。もはや農業者は農地を、職人は同業組合を、十人組騎士はクリアを放棄できなくなっていた。

400年に、ホノリウス帝は組合員(*collegiati*)を搜索するよう命じる。そして、かれらが一人の例外もなく、その職業に連れ戻されるのが(*ad officia sua sine ullius nisu exceptionis*)

revocentur) いたるところで見られるようになる(*ubicumque terrarum reperti fuerint*)。458年には、マヨリアヌス帝が同じような措置を新たに定める。かれは「生まれたところの者になりたくない」(*qui nolunt esse, quod nati sunt*) すべての人間が本来の身分に戻ることを望む。ワロンは言う。「出自の絆は、こうした、あらゆる事物の崩壊のなかで、国家のそれを押しとどめるための、かなり強力で、また一般的と見なされる唯一のものなのである。このように、出生の宿命は帝国の至高の法なのである……ローマはギリシャ文明を通り越して東洋のカースト制へと立ち戻ったのである」。国家の社会主義による浪費は、富を破壊し、カースト制度は人びとの移動を押し止めていた。したがって、新しいエリートは形成されえなかったし、上昇することもできなかった。だから舵取りをしていた完全に衰退し切ったエリートに、新しいエリートが、とって代わることができなかったのである。ワルツァンは言う。「中間階級と上層階級を刷新し、維持する上向運動は停止していた」と。

この社会は、死活にかかわる選択を迫られていた。それは死に瀕した集団であった。蛮族の侵入がこの社会を救った。この侵入によって外部からエリートがもたらされたばかりでなく、何よりも、侵入によってエリートの周流を阻んでいた堰堤が打ち壊されたからである。職人とかブルジョワが、イタリア共和国の繁栄を生み出すことになるのだが、かれらは外部から来たエリートではない。かれらは原住民族の出であり、帝政末期の制度が、かれらの上昇を阻んでいたにすぎない。中世の、アナルシーと呼ばれていたことがらが、かれらの上昇を許すのである。エリートの周流が再開される。そして、その周流とともに繁栄がふたたびやってくる。ローマ帝国の末頃、淘汰の一つの手段が現れる。それまでの淘汰の働きについて見られたのとは、さまざまな観点からして異なった手段、すなわち教会がそれである。中世では、教会が、

ほとんどすべての教養や知性のある人間を引きつけるようになる。この時代には、人間を選抜する手段として、聖職と軍人職を除き、どんな手段も無くなる。少し遅れて、淘汰の第三のあり方である商工業のおかげで都市が生まれる。そして、この商工業のエリートが、他の二つのエリートにとって代わるようになる。

キリスト教的共同体の内部で行われていた淘汰を、ほとんどの歴史家は見逃さなかった。「3世紀から、共同体の指導者たち、すなわち長老や監督たちは、専従の終身的高官となっており、かれらの間には、正真正銘の同業団体である、聖職者集団、*κληροποι* が形成されていた。そして、それは大衆、*λαός* すなわち俗人と区別され、切り離されていた……司祭と司教は俗人から選ばれていた。かれらは、宗教的社会とのかわりからすると、一つの指導集団であり、一つの統治組織であった。だが、この統治組織は宗教的社会そのものの以外に、どんな発生源ももってはいなかった」。他方、選挙は、宗教的な信条をもっぱら考慮して行われたわけではない。選挙によって、しばしば市民エリートの成員が選ばれていたのである。

聖職者の職業は、とりわけ5世紀から12世紀にかけて、すべての者に開かれていた。教会はあらゆる身分から、つまり上層と同様、下層から、そしてむしろ、よりしばしば下層から人材を補充したのであった。教会を中心に、誰もが特権制度のもとで地位についていた。教会は、ひたすら平等と競争の原理を維持していた。教会は、正当な優越者たちのすべてに権力の保持を促していたのである。少しずつではあったが、教会の統治組織は次第に貴族的になり、ついで、それは君主制への傾向をみせ、そしてローマの司教の覇権が確立する。しかし、このことは教会自体の内部で、新しいエリートが孵化するのを止どめはしない。これらの新しいエリートたちは、かれらの要求に宗教的形式を与える。ということは、その際、社会的な論争が表明される言語があったということである。往

々にして、かれらは古いエリートと完全に離反する。こうして離教あるいは異端が生じる。古いエリートは、ときおり新しいエリートを吸収し、そのエネルギーを自らの権力を再強化するために利用するようになる。このようにして11世紀頃、カタリ派が現れる。そして13世紀には、争いはアルビジョワ派にたいする十字軍の出兵にまで達する。他方、ローマは、服従する者を許し、傲慢な者を制圧する (*parcere subjectis et debellare superbos*) という原則を実行するのに十分な、力とエネルギーを、ふたたび、もつようになる。

中世には、きわめて興味深い試みが見られる。ある知的エリートが、専ら権力を行使する組織の試みがそれである。この試みが仮に成功していたなら、また教皇たちが、すべてのキリスト教国の絶対的支配というかれらの意図を実現しえていたなら、おそらく支配的エリートの宗教的性格は少しずつ薄れて、人文的、科学的性格が、それを凌駕するようになっていたであろう。ある見方からすると、現在のヨーロッパは、中国がそうであるのと似たようなものになっていたであろう。しかし、ことは、そのような筋道をたどって進展してはいない。なぜなら、一方で、これはもっとも重要な事実なのだが、好戦的エリートが権力を奪われるのを座視しなかったからであり、他方で、知的エリートの成員が団結し続かなかったからである。運動は、宗教的エリートを次第に切り離す傾向を見せるようになった。知的エリートは法律の研究とか科学的研究のなかに、そして重要なものとしては、経済的職業のなかに新しいはけ口を見い出すようになっていた。宗教的エリートと知的エリートは、一時、完全に入り混っていたが、ある時期から、かれらは競争相手となり、敵対者となった。そして、そのときから宗教的エリートの衰退が始まる。宗教的エリートは、弱体化したあと、その古い対抗者である好戦的エリートと和解したばかりでなく、完全に、これに依存したのである。

こうした出来事は、もし、基本となるものと、その形式とを切り離すと、まったく理解できないであろう。基本となるもの、それはエリートの周流の運動であり、その形式は、この運動が生起する社会にあって決定的影響力をもつ運動である。この形式は、中国では、教養人の口論、古代ローマでは政治闘争、中世では宗教論争、今日では社会闘争ということになる。中世に生きていた不満分子は誰もが、かれの改革の欲求を宗教的考えによって表明し、その論拠を福音書から取り出していた。仮に、かれが今生きていたとしたら、かれは同じ欲求を社会主義の理論によって表明し、その論拠をマルクスから取り出していたであろう。しかし、もし感情という基本となるものが人間の行動を促すとしたら、エリートの選定には社会形態の影響が感じられるであろう。これらのエリートは何ら絶対的なものをもってはいない。聖人のエリートと同様、山賊のエリートも存在しうるのである。カタリ派や、これに続くアッシジの聖フランチェスコの時代の聖職者は墮落し、背徳的であったが、それにもかかわらず淘汰の仕方は、名目的には宗教的、道徳的な完全さなるものを留めていた。ところで、この点から見るとカタリ派やフランチェスコ派は、実質的にはエリートであった。もっとも、経済的、社会的進歩といった別の観点から見ると、墮落し切っていたとはいえ、これらの聖職者は、そうしたエリートより優越していたと言えよう。もっと遅れて、16世紀に宗教上の大きな振動が生じたとき、新しいエリートの即位は、ローマから離反した国々ばかりでなく、とりわけローマ自体でも見られた。だが、この即位によって、ルネッサンスの輝かしい時期に終止符が打たれ、そして、おそらく幾世紀にもわたって宗教的寛容の確立に遅れが生じたのである。

市民的淘汰も、やはり4世紀に、ゴールで宗教的淘汰と競合するかたちで作用していたが、5世紀頃には見られなくなる。「学校へ通っていたのは、とりわけ上層階級の若者たちであっ

た。だが、この階級は、崩壊の真っ只なかにあった。学校は、この階級と一緒に落ちぶれた。制度は依然として存続してはいたが、中身がなかった。魂は肉体から去っていたのである」。

似たような進展が軍事的社会でも起こっていた。この社会は、その権力のもとで、宗教的社会には属さないあらゆるものを縮小させることによって終末を迎えていた。この社会は、その頃、主として経済力の影響下で衰退し始めた。この現象が、もっともよく観察されるのがイタリアである。というのは、このイタリアの国々で経済的再生が始まったからである。

すでに、ダンテの時代にフィレンツェの古い貴族は衰退しつつあり、新しいエリートがその地位につき始めていた。裕福なブルジョワジーは封建貴族との闘いに入る。だが、新しい階層が道を切り開こうとするのと同時に、ブルジョワジーと大衆の間の闘いが起こる。フィレンツェの歴史を研究する者は誰でも、フィレンツェ共和国とローマ共和国の社会的進展の並行状態に強い印象を受ける。類似は副次的な点にまで及ぶ。すなわち、アウグストゥスの皇帝の権力によってローマの衆愚政治に終止符が打たれたのと同じように、メディチ家の君主の権力によってフィレンツェの衆愚政治に終止符が打たれる、といったように。》¹⁶⁾

以上の歴史的事実の典拠として、パレートは、その古典にかんする豊富な知識を駆使して多くの資料を上げている。主な一次資料としては、テオドシウス帝の勅法彙纂、マヨール帝の新勅法があり、また、これに準ずる資料として、リヴィウスの『ローマ建国史』、ガイウスの『法学提要』をはじめとして、キケロ、カトー、メナンドロスなどの著作が使われている。また二次資料としては、もっとも高い頻度で参照されているのが、モムゼンの『ローマ史』、つぎが、同じくニーブールの『ローマ史』であり、これらはいずれもフランス語訳が用いられている。そ

16) [8] pp. 41-58.

の他、デュリュイの『ローマ人の歴史』やギゾーの著作などがある¹⁷⁾。

17) 以下、これらの引用、参照資料を一括して列記しておこう。ただし、パレートの文献表示は、かならずしも厳密ではないので、最低必要限度の補正を施してある。

1. Aristote, *Politique*. IV, 10, 10.
2. Belot, E., *Histoire de chevaliers romains*, Paris, 1873, II, p. 8.
3. Cato, *De re rustica*.
4. Cicero, *Philippica Tertia*, VI, 15.
5. Cicero, *Pro Quinctio*, Roscio Comoedo XIV, 42.
6. *Codex Theodesianus*, XII, 19, 1.
7. Coulanges, Fustel de, *L'invasion germanique*, p. 67.
8. Dante, *Divina Commedia*, Inferno, XVI.
9. Duruy, V., *Histoire des Romains* I, p. 223, p. 287, V, p. 529, VI, p. 361-362.
10. Francotte, H., *L'industrie dans la Grèce ancienne*, II, p. 327.
11. Gaius, *Institutionum commentari*, I, 96.
12. Guizot, F. P. G., *Histoire générale de la civilisation en Europe*, p. 139-140, p. 171.
13. Guizot, F. P. G., *Histoire de France*, I, p. 118.
14. Janssen, J., *L'Allemagne et la réforme*.
15. Lapouge, M. de, *Les sélection sociales*, p. 87.
16. Lecrivain, Ch. A., Gens, *Dict. Daremb. Saglio*, p. 1514.
17. Livius, Titus, *Ab urbe condita libri*, III, 65, IX, 46.
18. Luchaire, A., *Histoire des institutions monarchiques de la France*, II, p. 161.
19. Menandros, Arrius, *Deg.* XLIX, 16, 4, § 10.
20. Mommsen, Th., *Histoire romaine*, II, p. 3-4, 16, 35, 67, 69, 83, 84, 85, V, p. 120, 167.
21. Niebuhr, B. G., *Histoire romaine*, I, p. 550, 551, II, p. 153, III, p. 1-2, 47.
22. *Nov. Major*.
23. Salvemini, M., *Magnati e popolani in Firenze*, p. 24.
24. *Val. Max.* VIII, 6, 3.
25. Wallon, H., *Histoire de l'esclavage dans l'antiquité*, III, p. 220.
26. Waittzing, J.-P., *Etude historique sur les corporations professionnelles chez les Romains*, II, p. 263.
27. Willems, P., *Le sénat de la republique romaine*.

参考文献

- [1] Arcari, P. M., *La formazione psicologica della teoria della circolazione delle aristocrazie*, Cahiers Vilfredo Pareto, no. 5, 1965, pp. 213-258.
- [2] Borkenau, F., *Pareto*, Westport, (1936).
- [3] Busino, G., Introduzione, *I sistemi socialisti di Vilfredo Pareto*, Torino, 1974, pp. 9-52.
- [4] Busino, G., *Pareto, Croce, les socialismes et la sociologie*, Genève, 1983.
- [5] Pareto, V., Un'applicazione di theorie sociologiche, *Ecrits sociologiques mineurs (Œuvres complètes, tome XXII, Genève, 1980)*, pp. 178-238.
- [6] Pareto, V., *Cours d'économie politique (Œuvres complètes, tome I, Genève, 1964)*.
- [7] Pareto, V., Le péril socialiste (*Œuvres complètes, tome IV, Genève, 1965*).
- [8] Pareto, V., *Les systèmes socialistes (Œuvres complètes, tome V, Genève, 1965)*.
- [9] Pareto, V., *Traité de sociologie générale, tome II (Œuvres complètes, tome XII, Genève, 1968)*.
- [10] Rivista italiana di sociologia, Luglio 1900, pp. 401-465.
- [11] 川崎嘉元訳『エリートの周流』(垣内出版) 1981年(重版)。
- [12] 三浦岱栄訳『実験医学序説』(岩波文庫) 1979年。